

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730738

研究課題名(和文) 重度・重複障害児の高次の造形活動を導く指導原理・方法の構築に関する研究

研究課題名(英文) A study on the formulation of guiding principles and methods leading to highly advanced formative activities for children with profound intellectual and multiple disabilities

研究代表者

池田 吏志 (Ikeda, Satoshi)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80610922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、重度・重複障害児のQOL(Quality of Life)を高める造形活動の指導原理・方法を提示することである。そこで、本研究では先行研究の検討、及び特別支援学校の重複学級での実践研究を行った。本研究の成果は次の3点である。1) 1949年以降に公表された78稿の先行研究を整理・分析し、研究動向と課題を明らかにした。2) 従来経験知や暗黙知として認識されていた重度・重複障害児の造形活動の指導の実相を理論的モデルとして示した。3) 重度・重複障害児のQOLを高める指導の方策を、実態把握、題材開発、児童生徒と教員との関わり、授業運営、評価、授業改善の6種類の枠組みで示した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to present guiding principles and methods for formative activities to improve the quality of life (QOL) of children with profound intellectual and multiple disabilities (PIMD). After a literature review, practical research was conducted into classes for children with multiple disabilities in special needs schools. 1) Seventy-eight studies published since 1949 were organized and analyzed, revealing research trends and challenges through the years. 2) The actual state of guidance on formative activities for children with PIMD has previously been gathered as empirical and tacit knowledge and presented in the form of a theoretical model. 3) This study will present some guidance measures for improving the QOL of children with PIMD, within six different frameworks: fact-finding, subject matter development, assessments, student-teacher relationships, classroom management, and class improvement.

研究分野：美術科教育

キーワード：美術科教育 特別支援教育 造形活動 QOL 質的研究 ミックスメソッド アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

国内における、重度・重複障害児の造形活動の研究は 1980 年代初頭に始まった歴史の浅い研究領域である。そのため、学術誌に掲載された論文はわずかである。また、海外でも重度・重複障害児の造形活動に関する学術研究はほとんど行われておらず、ERIC による文献検索でも、このトピックで執筆された文献はほとんど見当たらない。

他方、実践現場に目を向けると、問いかけに対する反応がほとんど無い子どもたちに対する指導の困難性を、多くの教員が感じている現状がある。特別支援学校に在籍する児童生徒の障害の程度については、年々重度・重複化が進んでおり、平成 21 年版『特別支援学校学習指導要領』では、改訂のポイントとして、「障害の重度・重複化、多様化への対応」¹⁾が挙げられ、一人ひとりの実態に応じた指導を一層充実させていくことが今後の基本方針として示されている。

しかし、障害の重度・重複化が進む現状の中で、造形活動の効果的な指導原理・方法は未だ示されておらず、学校現場では造形活動の指導をめぐる困窮が生じている。このことから、重度・重複障害児を対象とした造形活動の指導原理・方法について、理論的、実践的に研究を進める必要があると考えた。

2. 研究の目的

上記の問題の所在に基づく本研究の目的は、以下の3点である。

- 1) 重度・重複障害児を対象とした造形活動の先行研究を調査、分析し、研究動向と課題を明らかにする。
- 2) 重度・重複障害児が在籍する特別支援学校の重複学級における造形活動の指導の実相を理論化する。
- 3) 重度・重複障害児の QOL (Quality of Life) を高める造形活動の指導原理・方法を構築する。

3. 研究の方法

(1) 研究目的1)の方法

CiNii、ERIC 等のデータベースを使用し、関連文献を収集した。その後、重度・重複障害児の造形活動研究(国内)、重度・重複障害児の造形活動研究(海外)、重度・重複障害児の教育研究、重度・重複障害児の QOL 研究の4つの枠組みで文献レビューを行った。

(2) 研究目的2)の方法

特別支援学校の重複学級での参与観察、インタビュー、ビジュアルデータ等の収集を行い、エスノメソドロジーの手法を用いて、集団における児童生徒と教員との関係性、QOL の向上といった社会・文化的観点から分析を行った。分析には質的研究法の中でも特に木下(2007)の「M-GTA」²⁾を用い、概念生成、

及び概念間の関係をカテゴリー化し、理論的モデルを生成した。

(3) 研究目的3)の方法

上記のエスノメソドロジーによる質的研究で生成した理論的モデルに基づく指導仮説を設定し、特別支援学校の重複学級で重度・重複障害児を対象とした造形活動のアクション・リサーチを実施した。アクション・リサーチは合計3期実施し、第1期、第2期は同一集団に対して、そして第3期は異なる集団に対して実践を行った。各期で仮説検証を繰り返し、児童生徒の QOL を高める造形活動の指導原理・方法を構築した。

4. 研究成果

(1) 研究目的1)の成果

研究動向の調査では、国内外の重度・重複障害児を対象にした造形活動に関する文献、特別支援教育分野における重度・重複障害児の教育研究、そして重度・重複障害児を対象とした QOL 研究に関する文献を収集し、レビューを行った。

本研究で収集した国内外の文献は全部で 339 稿あり、そのうち、美術科教育と特別支援教育の複合領域に関する文献で、特に重複障害児(知的障害と他の障害を合わせ有する児童生徒)を対象とした文献は 78 稿存在した。この 78 稿のうち、本研究を始めた 2012 年 3 月以前に公表された、本研究が対象とする最重度の障害程度の重度・重複障害児の造形活動をトピックとした学術論文は、木代(1993)³⁾と池田(2012)⁴⁾のわずか2稿であった。つまり、これまで当該領域の学術研究はほとんど行われてこなかったことが明らかとなった。

(2) 研究目的2)の成果

研究目的2)ではエスノメソドロジーの手法を用い、広島県内の特別支援学校2校を対象に約7カ月間で、13回、合計1700分間(約28時間)、対象校でフィールドワークを行った。対象校では、小学部、中学部、高等部の造形活動の授業の参与観察や授業外での教員との情報交換を行うと共に、作品や学習指導案等の文書の収集・撮影を行った。さらに、東京都、大阪府、広島県の3都府県、計4名の教員に対して、1名あたり約70分~150分の半構造化インタビューを実施した。

分析では、まず前者のうち、7単位時間(対象児童は6名)の授業内容をフィールドノートとしてまとめ、後者のインタビューデータは逐語録化した。これらを木下(2007)の M-GTA を用いて分析し、特別支援学校の重複学級で行われる重度・重複障害児の造形活動において、児童生徒と教員とはどのように関わり、教員はどのような意図を持って造形活動を行っているのか、また教員同士はどのように連携しているのかといった内容の理論化を試みた。

分析の結果、合計43種類の概念を生成し、これらの概念を25種類の下位カテゴリー、

9種類のカテゴリーとしてまとめ、構造化・モデル化した。9種類のカテゴリーとは、造形活動における教材教具を介した支援、児童生徒と教員とのコミュニケーション、心的環境作り、実態把握、題材開発、評価、TTにおける主担当教員の役割、副担当教員の役割、教員集団の役割である。これらをカテゴリーごとにまとめ、概念間の相関や下位カテゴリーと概念の位置づけを検討し、理論的モデルを生成した。

このように、各カテゴリーの理論的構造をモデル化したことで、特別支援学校の造形活動では何がどのように行われ、教員はどのように実態把握を行い、どのような意図で題材開発を行っているのか、また、授業中に教員はどのように児童生徒に関わり、評価を行っているのかという教員が有する実践知や暗黙知を言語化・視覚化することができた。さらには、TTで運営される授業で教員同士の関係はいかように成立しているのかといった重複学級ならではの真相も明らかにすることができた。

これらの成果は今後、特別支援学校の重複学級で実施される重度・重複障害児を対象とした造形活動の遂行プロセスや指導方法の理解に繋がる。

(3) 研究目的3)の成果

QOL評価法の開発

アクション・リサーチ実施に先立ち、本研究では重度・重複障害児を対象とした造形活動におけるQOL評価法の開発を行った。重度・重複障害児を対象としたQOL評価の在り方に関する議論は1980年代から始まり、現在も続いている。そこで、本研究ではLyns(2005)の「Life satisfaction matrix」⁵⁾を援用し、対象児の「意欲」と「能力発揮」とを枠組みとする6段階のループリックを用いたQOL評価法を開発した。本研究のQOL評価は、ビデオ映像の取り込みやループリックの作成、そして、ループリックを用いた評価や複数の評価者による一致率の算出等合計11段階の手順を経て行われ、単位時間当たりの児童生徒のQOLの状況を量的に読み取ることが可能な評価法である。中でも、この評価法の特徴は、個別特性に応じた評価が可能な点である。重度・重複障害児を対象としてQOLの高まりを見取る場合、その表れ方は児童生徒一人ひとり異なり、なおかつ、極めて微弱であったり一般的には喜びとは捉えられない方法で喜びを表出・表現したりすることがある。そのため、本研究では、ループリックの項目を共通のスタンダードとして示すのではなく、個人の特性に応じた個別の項目設定が可能なメタ評価指標とした。つまり、一人ひとりの実態に応じてループリックが変化する評価方法を用いている。このように、一人ひとりの実態に応じたQOL評価の指標を開発したことは、ヴィゴツキーが述べる、「もし障害児を彼に相応した尺度で計ったとすれば、特別に組織された教育による彼の

進歩は、正常児の教育よりも著しく明白な成果を実際に示すだろう」⁶⁾という提言に答え得る指標を示すことができたと考える。

ただし、本研究のQOL評価法には留意すべき点もある。これまで、重度・重複障害児を対象としたQOL評価で指摘されてきたのは、本人による主観的評価の困難性である。本研究で示したQOL評価法は、本人の実態を反映させたループリックを使用しているとはいえ、関与者の代理回答によって評価を行っている。題材の全授業終了後には、筆者の評価結果と担任教員の評価結果との一致率を算出したが、各項目の評価は評価者によってばらつきがあった。特に、明確な意思表示や表情の変化が見取りにくい児童の評価にばらつきがみられ、一致率が低い結果となった。最終的には、直接支援を行った教員の評価を優先し、修正を加えて確定したQOL評価結果を児童のQOLの高まりを見取るためのデータの1つとした。

このように、本研究で示したQOL評価法は児童生徒のQOLの状態を量的に示せたことには意義があるが、あくまでも複数のデータの1つとして用いる必要がある。児童生徒のQOLを測定するためには、量的、質的分析を含めたトライアングレーションによる総合的評価が必要であると考えられる。

アクション・リサーチ

平成24年12月から平成26年7月の期間に、合計3期のアクション・リサーチを実施した。3期のうち、第1期、第2期は同一集団に対して、そして第3期では第1期、第2期の研究成果を踏まえて他集団で実践研究を行った。

まず、第1期アクション・リサーチはA特別支援学校小学部3年1組(重複学級)で実施し、本研究の重度・重複障害児の定義に合致する2名の児童を対象に8単位時間の実践を行った。第1期アクション・リサーチでは、エスノメソドロジーによる研究成果で示した9種類のカテゴリーを「実態把握」、「題材開発」、「児童生徒と教員との関わり」、「評価」、「授業運営」の5種類の枠組みで再編し、アクション・プランを策定・実施した。分析にはCreswell(2007)の「ミックスメソッド」⁷⁾を用い、対象児童のQOL評価、特徴的な場面の抽出、教員への質問紙調査を実施し、これらを比較検討することで設定した仮説の有効性を検証した。その結果、本研究で設定した仮説には一定の有効性が認められた。また、検証後の考察により、造形活動において重度・重複障害児は「静止・微弱運動型」と「衝動・不随意運動型」の2つの類型に分けられること、さらに類型によって主担当教員と副担当教員の役割が異なることを示し、類型ごとの実態の階層と階層に応じた教員の役割をまとめた「実態階層・教員役割表」を作成した。また、教材教具をアフォーダンスの見地から見直す必要性も提案した。

その後、第2期アクション・リサーチでは、

第1期と同一の集団に対し5単位時間の実践を行った。第2期アクション・リサーチでは、第1期アクション・リサーチの成果と課題に基づき、児童生徒のQOLを高める「授業改善」の在り方を検討した。実践では授業改善モデルを仮説として示し、主に児童生徒の興味関心を中心に“うまくいっている所をさらによくする”ことを中心とした改善を試みた。実践後の分析では、授業改善のアイデア136種類、学習指導計画/評価表に記載された改善に関する副担当教員の提案10種類、改善の効果が明確に表れた8場面を抽出、分析し、仮説の有効性を実証した。また、同時に行った質的分析の成果として「授業改善理論的モデル」及び「授業改善チェックリスト」を作成した。本モデルでは改善過程を<改善のための判断>と<改善のための方策>の2つのカテゴリーで構成し、フロー図で示すことで、改善対象を見取る観点と改善を行う具体的方策を整理して示した。

最後に、第3期アクション・リサーチでは第1期、第2期アクション・リサーチの実施対象とは異なるA特別支援学校小学部1年2組の児童2名を対象に、4単位時間の授業実践を行った。第3期アクション・リサーチでは、第1期で検証した5種類のアクション・プランと第2期で検討した授業改善を加えた合計6種類の枠組みでアクション・プランを策定し、他集団に対して第1期、第2期で生成した指導理論・方法が有効であるかどうかを検証した。その結果、実施した6種類のアクション・プランの枠組み、及び指導理論・方法は造形活動における重度・重複障害児のQOL向上に一定の有効性が認められた。特に、造形活動に特化した実態把握の指標である「クラス内実態把握表」、「個別実態把握表」の活用、児童生徒の造形活動における発達段階と教員の役割を明示した「実態階層・教員役割表」の使用、そして、教材教具作成へのアフォーダンス予測の組み込み、そして評価における「新たな一面の発見」項目の導入と副担当教員と主担当教員との双方向的改善提案が、児童生徒のQOL向上に直接的・間接的に有効であった。

野崎ら(2012)は全国の特別支援学校で超重症児を担当する教員に対して質問紙調査を行い、教員が抱える困難と、困難を生む背景を調査している。野崎らは、263名の教員の回答を分析し、「児童生徒の実態把握、指導目標の設定、実際の授業の進め方、児童生徒の学習評価、自分自身の実践に対する評価といったあらゆる側面において多くの教員が困難を抱えていること」⁸⁾を明らかにしている。この調査結果に対し、本研究では野崎ら(2012)が調査した枠組みと多くの共通点を持つ、「実態把握」、「児童生徒と教員との関わり」、「題材開発」、「授業運営」、「評価」、「授業改善」の6つの枠組みにおける指導理論と方法を示した。本研究で示した指導理論・方法は、教員の困難さを解消する一助と

なると共に、造形活動における重度・重複障害児のQOL向上に役立つと考える。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省(2009)『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編(幼稚園・小学部・中学部)』教育出版、pp.6-7
- 2) 木下康仁(2007)『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』、弘文社
- 3) 木代喜司(1993)「障害児の指導実践から美術教育の原点を考える 京都府の養護学校における重度重複障害児の美術指導から美術教育の根源的基礎を考察する」『美術科教育学会誌』(14)、65-75
- 4) 池田史志(2012)「肢体不自由特別支援学校の美術- 感触遊びの延長としての作品作り」『大学美術教育学会誌』(44)、pp.63-70
- 5) Lynos, G. (2005). The Life Satisfaction Matrix: an instrument and procedure for assessing the subjective quality of life of individuals with profound multiple disabilities. *Journal of intellectual disability research*, 49(10), 766-769
- 6) ヴィゴツキー(L. S. Vygotsky)著、柴田義松・宮坂瑠子訳(2006)『障害児発達・教育論集』、新読書社
- 7) クレスウェル(J. W. Creswell)著、操華子、森岡崇訳(2007)『研究デザイン - 質的・量的・ぞしてミックス法 - 』、日本看護協会出版会
- 8) 野崎義和、川住隆一(2012)「『超重症児』該当児童生徒の指導において特別支援学校教師が抱える困難さとその背景」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』、60(2)、pp.225-241

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7件)

1. 池田史志、重度・重複障害児の造形活動のアクション・リサーチ - 衝動不随意運動型の児童生徒のQOL向上を目指して -、美術教育学、第36号、査読有、2015、pp.13-26
2. 池田史志、重度・重複障害児のQOL評価に関する文献レビュー、広島大学大学院教育学研究科紀要第一部、第63号、査読無、2014、pp.59-66
3. 池田史志、重度・重複障害児の造形活動の指導原理・方法に関する質的研究() - ティーム・ティーチングにおける各教員の役割の理論化に向けて -、美術教育学、第35号、査読有、2013、pp. 93-106
4. 池田史志、重度・重複障害児の造形活動の指導原理・方法に関する質的研究() - 実態把握、題材開発、評価に関する実践知の理論化へ向けて -、大学美術教育学会、第45号、査読有、2013、pp.23-31
5. 池田史志、特別支援学校における造形活動の日米比較 - ニューヨークでの現地調査を通して -、IRCN 国際交流情報、第9号、

査読無、2013、pp.11-13

6. 池田史志、重度・重複障害児の造形活動の指導原理・方法に関する質的研究 - 児童生徒と教員との関わりに焦点をあてた理論的モデルの生成 -、美術教育学、第 34 号、査読有、2013、pp.61-73、(第 11 回「美術教育学」賞 奨励賞受賞：美術科教育学会)
7. 池田史志、重度・重複障害児の造形活動に関する研究動向と課題、広島大学大学院教育学研究科紀要第一部、第 61 号、査読無、2012、pp.87-96

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 池田史志「重度・重複障害児の造形活動における授業改善の方策」、第 37 回美術科教育学会上越大会、2015.3.29、上越教育大学
2. Satoshi Ikeda, Art Education for children with Profound Intellectual and Multiple Disabilities. 34th World Congress of the International Society for Education through Art, August 7, 2014, Australia
3. 池田史志「重度・重複障害児の造形活動に関するアクション・リサーチ」、第 36 回美術科教育学会奈良大会、2014.3.28、奈良教育大学
4. 池田史志「重度・重複障害児の造形活動に関する質的研究」、第 35 回美術科教育学会島根大会、2013.3.29、島根大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 史志 (IKEDA SATOSHI)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：80610922